

文化財 ニュース

1 April 2012 Spring

■ 千代田区 新指定文化財特集号

平成24年度 千代田区指定文化財

有形文化財(歴史資料)

しん さい き ねん ひ
震災記念の碑

有形文化財(歴史資料)

い ざわ や も べ え ぼ ひ
井澤彌總兵衛墓碑



日比谷図書文化館 1階 常設展示室

常設展では「環境・人間・都市」をテーマに、千代田の古代から現代までを全5室(Ⅰ発掘されたくらしと環境 Ⅱ日比谷入江と中世千代田 Ⅲ將軍の城づくり Ⅳ江戸から東京へ Ⅴまちの歴史)の構成で紹介しています。

Index

- 2 特集 平成24年度 指定文化財紹介
- 3 区内文化財調査 石造物のもつ情報
- 4 埋文ニュース 文化財が語る地震被害
- 6 親子体験教室 「縄文土器作り」について
- 7 平成23年度 文化財特別展 こぼればなし
- 8 平成24年度 文化財企画展 案内

■ 旧四番町歴史民俗資料館から 日比谷図書文化館へ

平成23年11月4日の千代田区立日比谷図書文化館オープンにともない、これまで旧四番町歴史民俗資料館で行っていた区内文化財の調査・指定、歴史民俗資料の調査・収集・保存、埋蔵文化財調査、包蔵地の照会などの文化財・資料館機能は、日比谷図書文化館内の文化財事務室に引き継がれています。新施設の日比谷図書文化館は、旧施設に比べ常設展示室・特別展示室が拡充し、より多くの資料が公開できるようになりました。さらに、旧四番町歴史民俗資料館で発行していた「資料館だより」は本誌「文化財ニュース」としてリニューアル！新たな地で千代田区の文化財情報を発信していきます。

千代田区教育委員会では、平成24年4月1日付にて、新たに2件を文化財として指定します。

教育委員会には文化財保護審議会が設置されています。教育委員会からの諮問により候補物件の中から調査を行い、文化財として指定することが適当であるとの答申を教育委員会に行いました。答申を受けた教育委員会は、所有者から同意をいただき、指定に向けての手続きを進めてきました。以下では、2件の文化財について紹介します。(高木知己)

震災記念の碑 1基

種別:有形文化財(歴史資料) 所有者:千代田区

神田駿河台三丁目2番地に所在する石碑で、表面と裏面に銘文が刻まれています。

大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災では、麴町・神田の両区内でも、大半の地域で家屋の倒壊や焼失が生じて、多数の罹災者が出ました。彼らの中には、バラック収容前に焼け残った公立・私立学校の校舎で避難生活をした人もいました。

この一角には、私立東京商工学校が、大正11年4月から昭和26年3月まであり、焼け残った校舎で周辺の住民232人が、生活しました。

避難生活をした地域住民が、震災1周年にあたる大正13年(1924)9月1日に建設した石碑で、当初は総評会館の南側敷地内にイチヨウ1株とともに設置されました。のち地下鉄出口脇に移設され、平成15年に現在地に移設されました。

建碑者は、淡路町一丁目全域の自治組織である公友会、ならびに隣町の有志で、石碑の裏面には、発起人のほか約60名が寄付者として名を連ねています。

この「震災記念の碑」は、旧東京商工学校の行った地域貢献(避難先としての校舎提供)に対する地域住民の謝意と、災害時における地域の協体制の大切さを後世に伝えることを目的として建設したものであり、関東大震災の記憶を伝えている貴重な資料といえます。



震災記念の碑

井澤彌總兵衛墓碑 1基

種別:有形文化財(歴史資料) 所有者:個人・心法寺

区内で唯一境内墓地を持つ寺院、千代田区麴町六丁目の心法寺境内に所在しています。

墓碑正面及び左右側面にある銘文から、天明7年(1787)5月に建てられ、初代の井澤為永とその妻を合葬したものです。天明7年は、井澤為永没後49年目にあたるため、50年忌として新たに建てたと考えられます。

井澤家は初代為永が紀伊家に仕え、藩主徳川吉宗の將軍就任により旗本として召し出されました。井澤為永は、紀州時代には亀池の築造・新川の改修・藤崎井用水・小田井用水など紀州藩の土木工事に携わり、旗本となり普請役を勤めてからも新田開発・用水開削・湖沼干拓・河川改修等を行っています。これらの事業のうち、特に「見沼代用水」については、見沼通船堀の史跡指定、「井澤祠」・頌徳碑・銅像の建立など顕彰・評価がなされています。

この「井澤彌總兵衛墓碑」は、江戸時代の土木技術者として著名な人物井澤為永の墓碑であり、歴史的人物に関する墓碑として貴重な物件といえます。

※なお、墓碑の一般公開はされておりません。



墓碑

古文書は、ある時代のことを記した歴史資料です。けれども、路傍の石にも、歴史は刻まれているのです。千代田区では、平成23年度文化財調査として、区内石造物の基礎調査を行っています。石造物は、石で造られた遺物です。そこには、銘文といって、制作された時代や、制作者、ときにはその理由なども刻み込まれています。これらは、境内の片隅や路傍など、普段は人目の付かない場所にありますが、地域の歴史を語ってくれる貴重な資料です。

しかし、その石造物の制作された時代が古ければ古いほど、その間、風雪にさらされ、磨滅したり、破損したりして、その石の持つ「情報」が失われていくという問題を孕んでいます。昨年3月11日に起きた東日本大震災では、文化財関係の被災状況において、地震や津波によって破損する、倒壊するなど、石造物の被害も大きかったことが資料ネットワークの活動から報告されています。われわれが、こうした事態に対応するためには、まず、文化財を「把握すること」が第一義となるのです。

千代田区の石造物調査では、区内石造物の把握とともに、指定文化財物件2件の拓本調査を行いました。ここでは、平河天満宮の常夜燈の拓本作業を紹介します。

常夜燈は、寺社仏閣の伽藍におかれた燈火です。平河天満宮の常夜灯は、嘉永5年(1852)2月、石工の弥兵衛と留三郎によって制作されました。基壇部分には、雲龍堂とあり、側面には世話人や門弟たちの名、さらに龍海堂門弟の名が記されています。ここから、奉納主体は、麴町の寺子屋雲龍堂と、松田町(神田)の寺子屋龍海堂であることがわかります。平河天満宮には、ほかにも嘉永5年に奉納された狛犬や百度石、筆塚などがあり、この年が菅原道真の没後950年にあたることから、道真の遠忌として建立されたものと考えられます。

平河天満宮の常夜燈は、すでに磨滅・剥落も甚だしく、これまでその銘文を翻刻することは困難でした。しかし、拓本作業を行うことによって、これまで肉眼で読めなかった銘文も読める可能性が高くなります。石造物は、野外にあるため、常に風雨にさらされています。それは、ゆるやかに長い時間をかけて形状を変えていくことであり、いま目に見える情報が、最も最新のものともいえるのです。石造物の持つ情報を、出来るだけ多く後世に残していくこと。拓本を取るということは、現時点の情報を未来に伝えていく方法でもあるのです。

(小山貴子)



参道脇におかれた常夜燈の一部。一対のうち、一基は、昭和20年の空襲で破損したそうです。



常夜燈。もともとは一対ありました



剥落と磨滅。風雪によって石が削られ、銘文が読めなくなっています。小さな破損から、広範囲の剥落に広がる可能性があります。



和紙を張り、丁寧に墨をのせていきます...



常夜燈奉納関係者の名前が浮かび上がってきました...

文化財が語る地震被害

昨年の3月11日の東北地方太平洋沖地震によって、東北地方のみならず多くの地域で文化財や博物館収蔵資料が被災し、その復旧に窮しています。千代田区でも、江戸城の城門や石垣に被害がみられ、被災地域の広さを思い知らされました。

これまで東京では多くの地震被害が記録され、文化財調査などによって、その痕跡が確認されています。

元禄16年(1703)11月23日未明に起こった地震は「地震の前に地鳴りなる雷の如し。大揺りは三度、小揺りは数知れず。(中略)御城廻り所々破損」(『甘露叢』)と伝えられ、城内各所の被害が記録されています。

この地震では、江戸城東方の埋立地などで震度6強の烈震に見舞われ、城内各所の石垣や外堀の土手などが被災したことが発掘調査などによって明らかとなっています。また、発掘された石垣刻印石によって、江戸初期の築城期と同様に大名家に手伝普請をさせたほか、町人に発注して石垣を修築したことも確認されました。これによって、災害復興を通して町人の進出や、様々な技術導入が行われていたことがわかります。

江戸城外堀に位置する常盤橋門は、寛永6年(1629)に出羽・奥羽の大名により築かれた江戸五口のひとつ奥州道の出口で、江戸城の正門である大手門へ向かう重要な外郭門でした。明治維新以降も日本橋と丸の内を結ぶ拠点として受け継がれ、明治10年には洋式石橋の常磐橋が築かれました。

この常盤橋門も元禄地震で大きく被災した石垣のひとつで、その後幾度も災害で被災修復されていたこと



江戸城跡本丸石垣刻印「■濃屋庄次郎之築」 常盤橋門跡出土「チキリ」

がわかりました。特に大正12年の関東大震災では石垣が崩れたといえます。さらに関東震災後大正15年に建設された道路によって石垣の一部が削り取られるなど壊滅的な状況であったと思われます。これらは財団法人渋沢青淵翁記念会によって復旧され、昭和3年に国史跡に指定されました。その後、昭和8年に常盤橋公園として復興整備され、門跡と石橋が保存されています。

現在、千代田区で行っている石垣解体工事に伴う文化財調査では、寛永6年当初のものは少なく多くは後の改変ですが、構築当初と考えられる石材のうち角石と角脇石を「チキリ」と呼ばれる楔状の留具でずれを防止した跡が見つかり、また一部に紀伊半島あるいは瀬戸内海沿岸から運ばれた花崗岩が使われていました。建築当初は外郭正門に相応しい石垣であったことが確認され、関東震災後に復旧された部分にはコンクリートによる練積み石垣護岸としており、その方法も明らかとなりました。

現在、東日本大震災に続き首都直下地震への懸念が強まるなか、こうした近世・近代の文化財が語る地震被害と復興の歴史を知ることによって、将来に備える手がかりとなると考えます。

(後藤宏樹)



常盤橋門石垣全景



江戸城写真帖 常盤橋門(東京国立博物館所蔵) TNM Image Archives

「縄文土器作り」について



粘土の輪を重ねて形を作ります。

日比谷図書文化館(文化財事務局)では、3月3日(土)と、3月20日(火・祝日)の2日間をつかって、春休みの親子体験教室として、「縄文土器作り」を行ないました。

千代田区の体験教室では、これまでも、夏休みに親子で体験できるもよおしとして、竹と和紙を使ったうちわ作りや、江戸時代のおもちゃである泥面子(どろめんこ)作りを行なってきました。

今回は、縄文時代に使われていた本物の縄文土器を観察しながら、本物と同じ方法で作る体験です。

3月3日(土)は、土器の形を作りました。実際に作ると、土器がとても緻密に作られていることがわかります。観察も、ただ見るのではなく、そっくりに作ろうと思って行くと、手触りや厚みなどの細かい点に注意しなくてはなりません。縄文土器は、実際に煮炊きをするものですから、外面の装飾以上に、内面にもとても気をつけて水漏れしないようにしています。

3月20日(火・祝日)は、自分で作った土器を、窯を使わずに、野焼きという方法で焼きました。3日に作った土器を、20日まで置いて、乾燥させました。水分が抜けて、土器は少し縮みます。

20日は、よく晴れた乾いた天気で、土器を焼くには絶好の日和でした。

はじめに、火を作っておき、土器の温度が急に上がりすぎないように、土器を火の近くであぶります。

土器の温度がほどよく上がった後、火の中に入れます。この段階では、煤がつくので、土器は黒くなります。その後で、本焼きに入ります。本焼き後には、煤がとんで、土器は真っ赤に焼け上がります。縄文時代は、700度くらいの低い温度で焼いていたので赤く焼けるのですが、この日は温度がちょっと上がりすぎたためか、少し白くなってしまったところもありました。

みんな、しっかりと粘土をこね、きちんと文様を貼りつけたため、文様もはがれずにより土器が焼けました。

このような体験を行なうことで、昔の人の知恵にふれたり、歴史を好きになったりすることができればうれしく思います。

(水本和美)



はじめは周辺であぶり、やがて火の中へ。土器は真っ赤な炎につつまれています。



途中は少し煤がついています。



焼き上がった土器



みんな上手に出来ました。

平成23年度 文化財特別展 こぼればなし

平成24年1月17日から3月11日にかけて、文化財事務室最初の展示である特別展「文化都市千代田—江戸の中心から東京の中心へ—」を開催しました。

この展示は、これまで我々が資料収集活動を行ってきたなかで出会った資料それぞれに地域の歴史を語ってもらおうというコンセプトで行いました。すると、幕末から明治にかけての内容が多いことがわかり、展示ではこの時期に着目した次第です。

しかし、展示スペースには限りがあり、また新たに判明したことなどもありますので、今回は展示に盛り込めなかった若干の内容を紹介していきたいと思います。

◆ 岩佐純と一番町「武林写真館」

尾張藩医の家系に生まれ、のちに明治天皇の侍医などを務めた林龍之介(1843~1919)のご子孫からお借りした資料をみていくと、明治20年(1887)3月から大正3年(1914)4月までの27年間にわたって上二番町41番地ですごした頃の林家の様子がわかります。

右の写真は医学者岩佐純(1836~1912)の肖像写真で、台紙には「贈 林龍之介君」「侍医兼宮中顧問官従三位勲二等 男爵 岩佐純」と岩佐の直筆で書き込まれています。



岩佐純肖像写真(林調氏所蔵)

この写真がなぜ林龍之介に贈られたかという、その答えは彼の残した履歴書にあります。そこには、彼が明治7年(1874)3月に東京で宮内省侍医の岩佐純(1836~1912)に学び、同10年8月から自宅で開業し、岩佐の設立した告成堂病院でも勤務することになったことが記されているのです。

では岩佐純はどのような人物だったかというと、近代日本医学の学制を築いた明治時代の医学者とされています。彼は越前国元三上町の医師玄珪の長男に生まれ、坪井信良や佐藤尚中らに医学を学ぶとともに、

長崎に遊学してポンペに師事し、万延元年(1860)に福井藩主の松平茂昭の侍医となっていることから、すでに維新前から名医として手腕を発揮していた人物のようです。維新後も彼は新政府に重用され、明治2年(1869)に医学校創立取調御用掛となると、相良知安(1836~1906)とともに、ドイツ医学に基づく医学教育制度の採用を進言し、実現化に成功しています。その後も彼は学校権判事・文部大丞・宮内省大侍医・宮中顧問官などを歴任し、男爵を授与されるなど、医学界の重鎮として活躍しました。

岩佐の邸宅が一番町にあったことを考えれば、林龍之介は岩佐に抜擢され、明治天皇の侍医となっただけでなく、居宅も近くに構え、公私にわたって親密な交流を重ねていたことが推測できます。林龍之介が元福井藩主の松平春嶽(慶永、1828~90)から火鉢を拝領したのもこのような関係から理解できるでしょう。

また、この写真の台紙には「東京麹町区一番町 武林」と印刷されていますが、写真師の武林盛一(1842~1908)の写真館が一番町11番地(現千代田区三番町)にあり、そこで撮影されたことを示しています。

武林は天保13年に弘前に生まれ、安政5年(1858)に蝦夷地へ渡り、箱館奉行所の外国船検査掛となったのをきっかけに写真に興味を持ち始めたといえます。彼は維新後は箱館府に仕えながら、洋装姿の土方歳三を撮影したことで知られる写真師田本研造(1832~1912)に師事して写真術を学び、明治4年(1871)に函館で写真スタジオを開くと、翌年に開拓写真御用掛に任命され、北海道各地の記録撮影をしています。

武林が東京に写真館を開いたのは同17年のことで、その場所が林龍之介の居宅にほど近く、林家がここで多くの写真を撮影していることは、今回の特別展でもご紹介した通りです。

そこでも取り上げた写真収納箱には、写真の大きさごとの料金規定が記載されているほか、簡条書きで①「御撮影ニ相成候種板十ヶ年間保存有之候ニ付、御注文之節八御写シニ相成候年月ヲ御申越被下度候」とあるように、撮影した種版を10年間保管し、撮影年月を言えばすぐに複写できるシステムになっていること、②そのための方法として「廿四年五月一日御写シ之分

八御写真裏面ニ番号記載有之候ニ付、右御申越被下度候」と、明治24年5月から裏面に写真番号を付すことにしたこと、そして③「郵便ニテ御注文之節八遠近ニ不拘、右写真代価及ヒ御送料共前金御送付被下候得ハ、出来之上早速御送付可仕候(但シ代価之義ハ郵券代用不苦候)」とあって、前金を送付すれば写真の郵送にも対応していることが記されています。

明治期の高名な医学者岩佐純とその弟子林龍之介、そしてこの2人を撮影した写真師武林盛一…林家伝来の写真からは、明治という時代に活躍した彼ら結びつけた、番町の土地の記憶が蘇ってきます。

◆ 和泉屋垣見家

一方、明治中期に刊行されたとみられる『東京商店案内』という資料には、神田・日本橋を中心としたさまざまな商店が紹介されています。特別展では北辰社の部分を取り上げましたが、ここでは麹町五丁目(現麹町三丁目)の和泉屋垣見家をご紹介します。

『東京商店案内』では、「君か香本舗 麹町区麹町五丁目十四番地 和泉屋事垣見佐右衛門」として掲載され、「家製三種香油之義、明治十四年第二内国勲業博覧会へ出品候処、忝モ其製善良ニシテ価格亦貴カラズ、販額從テ多シ、頗ル嘉ス可シ」と記されていることから、明治14年(1881)に上野で開催された内国勲業博覧会に同店の「家製三種香油」が出品され、その品質の良さと低価格で多く売れたようです。

ここにいる3種とは、挿絵にある「馥郁油」「君か香」「艶花油」のことで、当時同店で製造・販売する主力商品だったことがわかります。

また「香油之雛形」としてこの3種の説明文を載せ、「馥郁油ハ香油中第一等ノ佳品ニシテ、常二用ヒテヨク諸邪ヲサケ、包(匂)ヒ袋ノ代用トナル、其品格舶来ノ上品ニモマサルベシ」とあり、「馥郁油」は匂い袋の代用となるもので、舶来品にも勝る上品であると述べられています。そして挿絵のピンには「皇国第一等之佳品」とあります。一方、「君か香」については、

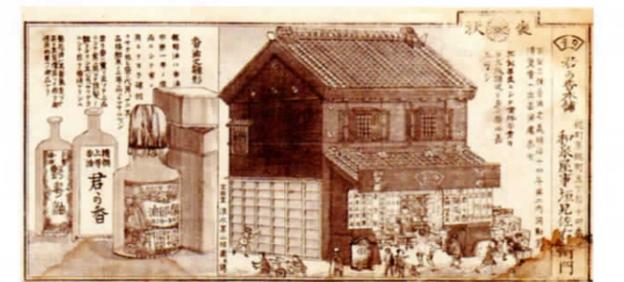
「薫り至ツテ上品ニシテ、常二用ヒテ頭髪ノ艶ヲヨクシ、且心気サワヤカニシテ、自ヲ愉快ナラシム」とあるように、こちらは髪油だとわかります。そして「艶花油」は「其香気至ツテ高く、其定価至ツテ低ク、御徳用向専一ノ御品ナリ」と、廉価なお徳用の香油として売り出されていたようです。なお、本書では「君か香本舗」と紹介されていることを考えれば、特に「君か香」で知られる店だったのでしょう。

ちなみに、店先を描いた挿絵をみると、「発汗水」や池之端仲町守田治兵衛の「宝丹」「宝丹水」、岸田吟香の経営する薬種店楽善堂の「補養丸」「鎮溜飲」「穩通丸」、さらには「売薬受売券」といったものも売られていたようです。同店はまたそのほかにも、蠟燭(蠟燭のマークに「おろし小うり」)や「舶来石炭油」「火止石炭油」といった石油も取り扱っていました。

垣見家は由緒書によると、近江国神崎郡垣見村発祥の一族で、江戸時代中期には麹町の呉服商(のち質屋)として活躍していたことがわかっています。そして麹町六丁目(現麹町四丁目)の垣見八郎右衛門家も同族で、こちらは明治13年7月刊行の『東京商人録』に「酒醬油商」として紹介され、大正5年の『時事新報』に掲載された「第三回調査全国五拾万円以上資産家」には、「六十万円 垣見八郎右衛門(酒醬油)麹町六ノ七 略歴 明治十八年八月出生、同四十四年六月先代ふみの入夫となりて家督を相続し屋号を和泉屋と称す」と紹介されています。

どちらもご子孫は麹町に健在であり、こうした資料からは、麹町という地域で江戸時代以来の商家が明治という時代をたくましく生き抜いた姿をうかがうことができるのです。

(滝口正哉)



『東京商店案内』和泉屋垣見佐右衛門

平成24年度 文化財企画展

「戦後の東京—復興・発展—」(仮)

平成24年

7月17日(火) - 9月2日(日)

休館日 8月20日

開館時間 月～土 10:00～18:00
日・祝 10:00～17:00

入館料 無料

会場 1階特別展示室



本展示では、昭和20年代以降に撮影された写真資料を通して、東京・千代田の風景や人々の生活の移り変わりを紹介します。終戦から立ち上がり、復興のひとつの到達点として迎えた「東京オリンピック」や高度経済成長期がもたらしたものは何だったのでしょうか。こうした時代の風景や人々の姿を通して、現在を再確認し未来を考えるきっかけとなれば幸いです。詳細は次号本誌にてお知らせします。

編集後記

昨年11月4日に旧四番町歴史民俗資料館から日比谷図書文化館(文化財事務室)へと機能移転を果し、初めての春を迎えようとしています。文化財事務室では、新館オープンにともなう新常設展示の設営、歴史・民俗・考古資料の移送、そして第1回文化財特別展の開催・・・と慌ただしい日々が続きましたが、ようやく落ち着き、新施設での業務にも慣れてきました。未だにご迷惑をおかけしている点多々あるかと存じますが、今後も本誌や文化財ホームページを通して、千代田区の文化財情報を発信していきたいと思ひます。

(加藤紫識)

文化財ニュース 第1号

発行日 平成24年3月31日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://hibiyai.jp/bunkazai/index.html>
e-mail: rekimin@vesta.ocn.ne.jp

印刷 株式会社 商華堂



開館時間 月～金 10:00～22:00
土 10:00～19:00
日・祝 10:00～17:00

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日 年末年始
特別整理期間

- 東京メトロ丸の内線・日比谷線・千代田線 霞ヶ関駅 徒歩5分
 - 東京メトロ 千代田線・日比谷線「日比谷駅」徒歩約7分
 - 都営三田線 内幸町駅 徒歩3分
- ※当館に駐車場はございません。